路は長六、二kmである。

川幅は本川二八〇—四〇〇m、支川三篠川一〇〇、根ノ谷川五〇、古川二八〇—三四〇とす。堤防は本川天端幅六—八m、三篠川、根ノ谷川四m、、古川五mと定めた。法は表裏共二割とし、堤高は計画高水位上一、五mとする。

放水路入口の旧川締切り個所には固定堰および水門を設けて、市内に入る流量を調節する。

土工の予定量は

堀削浚渫土量	放水路（三篠川合流迄を含む）	六〇七万m³余（内人力 五八万m³（約一〇%）	
	上流	二五六〃（内人力 六五万m³（約二五%）	
	計	八六三〃（内人力一二三万m³（約一四%）	
築堤土量	放水路	一九六〃	
	上流	二三〇〃	
	計	四二六〃	

工費は物価騰貴で段々増加し、三十年九月現在予想八十八億千三百七十余万円となつた。工程は昭和三十年九月までに放水路三五%上流二四%で遅々である。併し立退問題解決したから今後は進工捗取るものと思わる。

常願寺川

常願寺川は明治二十五年デレーケの計画にて川幅を左方に八〇〇mに拡げた。この川は立山々系より流下し、極めて急峻河川であつて砂礫の流下多く、川幅広く常水路なく、横流して堤防の危険甚し。改修は川幅を適当に

縮め、堀削して常水路を設け、且つ水制にて流水を河心に集中せしめる。堤防は鎧堤式とした。

改修は昭和十二年起工である

豊川

改修区域は愛知県八名郡八名村以下海まで二三kmとし、豊橋市上手より上流は旧川筋の旧堤拡築または新堤を作り、豊橋市上手にて右方に新川を開削して放水路とし、旧川は締切り平水のみを流し、市内高水の害を除く、旧川は川口に導流堤を作り浚渫を施こして、前芝港の船の出入に便す。

昭和十三年度起工である。

（三）諸氏の工事経歴

明治時代内務省の主なる技師の内、沖野博士と関係が深かつたと思はるる、人々の略伝である、其功労に対し敬意を表す。（　）は内務省以外の人。戦災等にて官庁に履歴書少く、遺族も不明の人多く、集録は困難であつた。

古市公威	小柴保人	（植木平之丞）	岡崎芳樹	市瀬恭次郎	
石黒五十二	小林八郎	近藤虎五郎	渡辺六郎	名井九介	
日下部弁二郎	佐伯敦崇	南部常次郎	早田喜成	比田孝一	
岡胤信	中原貞三郎	原田貞介	西尾虎太郎	安達辰次郎	
青木元五郎	近藤仙太郎	丹羽鋤彦	三池貞一郎	青木良三郎	

南斎孝吉	（丸田　覚）	野村　年	辰島鎌蔵	蒲　孚（林、土）	
長沢　忠	（田川正二郎）	坂本丹治	高西敬義	赤木正雄（林）	
今泉安之助	森垣亀一郎	徳田文作	大久保清長	川上新太郎（機）	
安芸杏一	真田秀吉	野田孝一	金古久次	本間源兵衛（機）	
中川吉造	田賀奈良吉	荒井釣吉	谷口三郎	加納盛吉（機）	
宮川　清	片山貞松	青山　士	福田次吉	嘉納謙作（機）	
（小林泰蔵）	田中吉二	市来尚治	牧野雅楽之丞	田中捨之丞（機）	
池田円男	金森鍬太郎	村　幸長	山内喜之助	高松政正（化）	
島　重治	坂本助太郎	並川熊次郎	平井新六	以上七十七人	
前川貫一	熊谷直道	大岡大三	物部長穂		
原　静雄	新関寿之助	木津正治	筧　斌治		

古市公威

姫路藩士で、安政元年（一八五四）閏七月十二日江戸蛎殻町の藩邸に生る、明治三年十月（十七歳）（一八七〇）貢進生に選ばれ大学南校（一橋ニアリ）に入学す、南校は後第一番中学、開成学校と改称された、現今の東大の本である。

南校在学中明治八年仏国留学を命ぜられ、巴里のエコール、サントラル工業大学予科エコール、モンジュ入学、翌年七月エコール、サントラルに入り、十二年八月（二十六歳）優等にて卒業し、アンジェニウル、アール、エ、

マニュファクチュール（工学士）の学位を受け同年十二月巴里理科大学に入り数学天文学研究、十三年（二十七歳）卒業、リサンシエ、エス、シャンス、マテマチックの学位を受く（理学士）十月帰朝（二十七歳）、十二月十一日内務省土木局雇（月俸百二十円）、十四年五月准奏任御用掛、土木局勤務、十月文部省御用掛兼、東京大学講師（数学）、十五年文部省を辞し、土木局で直轄工事監督となる。十九年五月工科大学教授兼学長、内務二等技師兼務。二十一年五月七日工学博士、因に、昭和十二年六月五日氏の銅像が有志により大学構内に建てられた。工科大学は氏が其基礎を定めたのである。

内務省にては土木局長（二三、五―二七、六　二九、二―三一、七）や土木技監兼（二七、六―三一、七）で事務官技術官万能であつた。

沖野博士とは共に安政元年生れで、古市博士が明治八年洋行、沖野博士は九年洋行共に仏国に学び古市氏は一年早く帰朝し兄分となつた訳である、且つ古市氏は才気煥発事務技術共によくし、表役者であつたが、沖野氏は古市氏の初めた事を更に拡げて之を実行に移し、完成した人で挾く深かつた、性淡泊無慾で裏役者であつた。国家に対する功労は、兄たり難し弟たり難しであろう。戦国時代の信長が天下に覇たる荒削りをしたのを、秀吉が之を完成したる如きか。共に明治土木の元祖で大恩人である。

明治三十六年三月鉄道作業局長官、同年十二月京釜鉄道総裁となり、一カ年にて全線開通せしめ、日露戦争の間に合はせた、三十八年十月韓国勲一等大極章、三十九年四月日本の勲一等瑞宝章（三等より飛んで一等となる）同年六月統監府鉄道管理局長、四十年六月帰朝す、大正八年十二月男爵を授ける、同十三年一月枢密顧問官、昭和二年十二月正三位、四年一月勲一等旭日大綬章、七年十二月従二位、九年一月二十八日病篤し旭日桐花大綬章

加賜さる、同日東京渋谷にて薨ず、享年八十一、七男三女あり、長男六三家を嗣ぐ（採礦工学士、住友にあり）

内務省では、土木局内で、昭和十九年七月創設の土木監督署条令、二十九年発布の河川法、三十年の砂防法に尽力し、信濃川、木曾川、淀川等大河川の改良計画、大阪東京の水道、河川港湾の調査等々。外部の仕事は工手学校（現今の工学院大学）創立発起人、東京仏語学校（今の法政大学）、学士院第二部長、理化学研究所々長、内国勧業博覧会審査部長、工学会等に尽力し、土木学会初代会長、学士会組成、昭和四年万国工業会議会長等々、真に本邦科学界の泰斗である。藍綬褒章及飾版を下賜され、又貴族院議員、英国米国土木学会名誉会員となつた。

趣味は梅若流謡曲と能であつて、相当上手であつた。

石黒五十二

加賀藩で金沢の人、安政二年六月十日生

明治四年開成学校入学、十一年七月東京大学理学部卒業、理学士、二十四年八月二十四日工学博士。十一年九月十一日神奈川県土木課雇（月俸六十円）十二年文部省より英国留学命ぜられ、十五年十一月英国工学院より土木工師の称号を受く、十六年二月帰朝、英国にては学校卒業後灌漑土木に従事すること一年余、帰朝後十六年四月内務省御用掛準奉任（月俸百二十円）衛生局兼土木局事務取扱、後土木局専務となる、十七年一月文部省御用掛東京大学理学部講師嘱託、十九年六月十八日海軍技師兼となり建築委員命ぜらる、七月二十九日内務省第六区（久留米）土木監督署巡視長となる、海軍の方は第二第三鎮守等の土木主任である、二十三年一月八日海軍を辞す。

同年八月七日第三区（新潟）土木監督署々長兼第一区（東京）第二区（仙台）署長となる、二十四年八月十六日第一区署長、二十六年二月二十五日臨時横浜築港局技師兼となり、二十九年六月五日基隆築港調査員嘱託、三

十年六月三十日土木監督署技監となる。

其頃は沖野博士と石黒博士の二人が技監となり、一、二、三区は石黒氏、四、五、六、七区は沖野氏受持の二頭政治の関係となつてをつた。

八月三十日製鉄所創立事務嘱託、三十一年一月二十三日土木監督署退官、翌日海軍技監となり、臨時海軍建築部工務監拝命す、三十二年十一月三日欧米各国へ出張、三十九年三月三十一日勲二等旭日重光章、十一月十三日退官、従三位、大正七年土木学会々長に推さる、土木家として誠に功労顕著であつた。四十年勅選議員、翌年錦雞間祇侯となる、大正十一年一月十四日薨す、享年六十八、息九一工学士家を継く。海軍在職中旅順口又は石狩港留萌港設計依託さる。退官後は宇治川電気会社技師長となり宇治の四万余馬力の第一期工事を完成す、又三池築港顧問として尽力した。

日下部　弁二郎

近江水口藩士の家に、文久元年二月三十日生、旧厳谷弁二郎であつたが書家日下部鳴鶴の養子となる。明治十三年（年二十）東京大学卒業理学士、明治三十四年八月八日工学博士。十三年十二月十一日内務省御用掛準判任（月俸三十円）土木局勤務、同年十二月二十四日宮城県在勤（北上川）、十七年内務技師補（月俸四十円）岩手県在勤（一ノ関にて北上川低水工事）十八年九月十日徳島県在勤（吉野川修築）十九年五月十三日内務三等技師、吉野川土木局出張所勤務、十九年七月二十九日第五区（徳島）土木監督署創設され巡視となり、二十年四月巡視長田辺義三郎代理として徳島在勤、吉野川に居つたが、西覚円破堤にて問題起り、二十二年七月工事中止となり、監督署は広島に移り、二十七年十月一日第六区（広島）署長となる。広島軍用水道計画に尽力した、第六区には直

轄河川はなかりしも管内土木の監督をなす、二十九年七月九日第七区（久留米）署長となり筑後川改修に尽力す三十一年一月二十四日第一区（東京）署長に転し利根川工事と府県土木の管督をなす。三十九年十一月二十一日退官す。直ちに東京市技師長となり、大正十三年十二月二十四日退職す、大正十四年土木学会々長。

昭和九年一月二十二日東京にて逝去、享年七十四、正四位勲五等、

岡　胤　信

長野県佐久郡の人、安政六年十二月二十七日生、明治十三年東京大学卒業理学士、年二十二歳、三十二年三月二十七日工学博士、

学校卒業後直ちに内務省に入り、御用掛土木局勤務となる、十六年七月三十一日札幌県十二等出仕兼内務省十二等出仕となる、十七年七月十五日内務技師試補に任ぜられ、十九年七月二十九第三区（新潟）土木監督署勤務土木巡視となる、当時の仕事は府県土木の監督と信濃川の修築低水工と築堤工事であつた（堤防は府県施工の規定であるが、岡氏は県の嘱託として築堤工事も担任した）

二十二年八月七日土木監督署四等技師、二十四年八月十六日第六区（久留米）土木監督署々長となつた、二十七年二月十四日朝鮮国へ差遣さる、二十九年十月二十四日欧米各国へ出張す、之は淀川改修用諸機械買入のためであつて、長沢忠及機械の川上新太郎を同伴した、帰朝後三十一年一月三十一日退官す、従五位勲五等。直ちに大阪築港に入り沖野工事長の下に工務課長となり、四十一年六月十九日築港大体竣工の時退職した、翌年三月五日大林組に入社し取締役技師長となり、同社の基礎を固めた、大正十二年五月四日退社す、爾後は顧問となる。昭和十四年十月八日東京駒込にて逝去、享年八十一、令息海軍少将嗣く、其死後孫の一郎現在駒込宅にあり、

氏は退官後尤も心血を注きたるは大林組の請負える大阪軌道会社の生駒大隧道の開削であつた、二哩八鎖の広軌複線で、本邦最大のものであつたが（複線の丹那トンネルは大分後で大正七年着手である）新式の諸機械を買入れ、氏の負けず魂で頑張り通し、竣工せしめたのは中々の功績であつた。此工事には木曾川改修に居つた有馬義敬技師を伴うて施工した。

氏は酒好きで、相当遊んだ人で、晩年も不羈磊落振りは宴会の時も発揮した、或時は寝巻姿で腰の物を顕はして平気で玄関に出て来た事もあつた。工事現場では中々監督厳で、癇癪玉を破裂させたことも多かつたと聞いてをる。

青木元五郎

館林藩の人、安政二年九月九日生、明治十三年東京大学理学部土木科卒業理学士、大正四年二月九日工学博士

明治十三年十一月十八日神奈川県土木課に入る（月五〇）、十七年七月二十二日島根県へ出向、土木課勤務（七五）、二十年四月二十八日内務五等技師第六区（久留米）土木監督署巡視となる、二十二年二月十九日第五区（広島）兼務、二十三年八月七日第五区兼第六区勤務となる、二十四年八月十六日第一区（東京）勤務、（利根川及監督部）、二十九年六月十六日第六区（広島）土木監督署長となる。三十八年四月一日官制改正、内務技師大阪土木出張所勤務直轄工事部長工務係長となる、四十年五月七日名古屋土木出張所長に転し木曾川工事に尽力す、四十二年四月二十日欧米各国へ出張命ぜらる。四十四年四月十一日仙台土木出張所長に転し北上川改修に尽力す、大正二年六月七日大阪土木出張所長となり、六年十二月二十七日退官す、従三位勲三等。昭和七年十月七日兵庫県鳴尾にて逝去、享年七十八。退官後は兵庫県嘱託となつた。

氏は極めて洒脱で滑稽上手で、談話も面白く、部下も喜んで仕へた。長男保雄、土木工学士。

小柴保人

千葉県の人、安政六年一月一日生、明治十三年東京大学卒（年二十二）理学士、三十四年八月八日工学博士。十三年八月十一日内務省御用掛准判任（月俸三十円）、土木局事務取扱、十四年十一月一日宮城県在勤（北上川）、十五年十二月二十四日十三等出仕、十六年八月十日十二等出仕、内務技師補、岩手県在勤（北上川）、十九年五月十三日内務二等技手判任二等給中級俸、北上川土木局出張所在勤、同年七月二十七日五等技師、奉任五等、中級俸、二十九日第二区（仙台）土木監督署在勤土木巡視となり、巡視長沖野忠雄の代理す。二十二年五月二十九日四等技師奉任四等、八月七日土木監督署四等技師、奉任官四等、二十四年八月十六日第三区（新潟）土木監督署長、三十一年十二月二十八日高等官二等、三十八年四月一日官制改正内務技師新潟土木出張所長、四十四年四月十一日土木局調査課長、大正二年六月七日退官、従三位勲二等。大正十三年五月九日逝去、享年六十六、三男文三郎機械工学士、東北大講師、家を継ぐ。

小林八郎

東京の人、明治十三年工部大学校卒工学士

明治十九年頃は内務省静岡派出所在勤であつた、多分富士、大井、天竜川の改修係であつたと思はる、其後第二区（仙台）土木監督に転し、二十四年八月より三十八年三月三十一日迄内務省第二区（仙台）土木監督署長として永年北上川修築と府県土木の監督に尽力す、三十八年官制改正退官す、大正八年頃死、其他不明。

佐伯教崇

明治十三年工部大学校卒工学士

氏は初より木曾川低水工及改修工事に従事し、巡視長又は署長の田辺義三郎、沖野忠雄の下に代理をなし、二十七年十月一日より二十九年三月九日迄は第四区（名古屋）土木監督署々長となり、永年木曾川に尽力した、退官年其他の履歴は何処を探すも不明なるを遺憾とする。

中原貞三郎

岩国藩の人、安政六年一月十七日生、明治十五年（二十四歳）東京大学卒理学士、大正四年二月九日工学博士。初め陸軍省陸地測量部に入り、三角測量及製図に従事す、同処発行の地図創始の元祖である、測地学に精通す、後熊本県技師となり、後内務省に入り三十一年一月二十四日第七区（久留米にあり、後熊本、福岡に移る）土木監督署々長となり、府県土木監督と筑後川改修と尽力す、三十八年三月三十一日官制改正廃官となる、三十九年七月統監府技師となり、比田孝一、安田不二丸、片山貞松、中桐春太郎外技手工手を率いて、朝鮮の京城、平壌、郡山、大邱の道路整備の監督をなす。

四十一年頃帰朝、大阪市水道課長となり、四十三年一月辞任し、四十四年四月十一日大阪土木出張所長となり、淀川、吉野川、高梁川改修に尽力す、大正二年六月七日東京土木出張所長に転し、利根川、渡良瀬川、荒川改修工事に尽力す。十二年五月九日退官、昭和二年十二月四日東京にて逝去す、享年六十九、従三位勲二等、大正十二年土木学会々長、長男法学士寅太家を嗣ぐ、日本銀行にあり。氏は酒も煙草（シガー）も嗜み、時に滑稽談を以て人を笑はせた、予（真田）は氏の薫陶により人世学に得る所が多かつた。

近藤仙太郎

金沢藩の人、安政六年四月二十四日生、明治十六年東京大学卒理学士、大正四年二月九日工学博士。

学校卒業後直ちに内務省に入り、利根川低水工事に従事し、十九年七月二十七日第一区（東京）土木監督創設

の時巡視長山田寅吉の代理として、又巡視長田辺義三郎の代理として、府県土木の監督と利根川工事に従事した、三十九年十一月二十四日東京土木出張所長となり大正二年六月七日退官す。正四位勲三等。

昭和六年一月二十二日東京にて逝去、享年七十五、子なし未亡人他喜氏、

氏は一生利格川に始終した功労者で後の中川吉造氏と共に利根川の主であつた、農大講師として農業土木を講じた事がある。氏はお上品の人で、茶を好み、時に竹や蘭を画いた。

植木平之丞

山口県の人、文久元年一月生、明治十五年工部大学校土木科卒、工学士、大正四年二月九日工学博士。

初め山口県出仕。一九年三月鉄道技手宇都宮日光間従事。二〇年九月—二五年四月日本土木会社。二六年九月南和鉄道技師長。二八年一一月大阪市下水道工事長、三〇年一〇月一一日—三六年五月一七日大阪築港突堤工場主任。四二年一一月三井に入り大牟田築港（閘門式）主任、大正十一年一月退社。昭和七年三月十六日死享年七十二。

近藤虎五郎

新潟県村上の人、慶応元年六月一日生、小学時代より優等、大学にて特待生たり、明治二十年帝大土木科卒工学士、二十三歳、同僚より三ツ年少であつた、三十二年三月二十七日工学博士。

卒業後直ちに内務省に入り、二十三年一月十九日技師試補、第一区（東京）土木監督署勤務、二十三年八月七日技師、二十四年八月十六日第二区（仙台）勤務、二十八年二月四日土木局製図課長、二十九年十二月二十一日第五区（大阪）土木監督署の直轄工事部、三十一年七月十九日土木技監事務取扱、三十五年四月十一日土木局直課工事課長、三十八年四月一日治水課長兼工務課長、四十年五月七日監理課長、四十四年四月七日技術課長兼直轄工事

課長、大正九年六月十五日第一技術課長となつた。十一年七月十七日東京にて病死す、享年五十八。正三位勲二等旭日重光章。長男農学士光之家を嗣く。

右の通り氏は初め土木監督署に居つたが、後土木局内で府県土木の監督に当り、其間各種の委員会（道路、港湾、治水、都市計画、下水、神宮造営、帝大教授、鉄道技師兼）等に関与し、其広きこと古市博士に次ぐ位であつた、欧米出張二度。氏は府県に対しては大勢力があり、直轄工事の沖野博士に匹敵する位であつたが、僅々五十八で病死せるは国家のため惜しき限であつた。

南部常次郎

東京の人、明治二十年帝大土木科卒工学士、又米国コロネル大学に学ぶ、大正四年二月九日工学博士。

前の経歴不明なるが、三十一年頃第七区土木監督署（福岡）技師で、又長崎港浚渫に従事した事がある、四十四年内務省に入り土木局在勤、其年東京土木出張所富士川支流笛吹川上流の日川砂防堰堤や石造水制担任す、大正三年青森築港に転す。後銚子漁港修築主任となる、八年二月六日東京にて逝去。

原田貞介

周防室積の人、慶応元年三月七日生、明治二十四年独逸ベルリン、ポリテクニシエ、ホホ、シユーレ卒業、工学士、大正四年二月九日工学博士、

明治二十五年五月二十五日第四区（大阪）土木監督署技師となり、淀川改修の調査計画をした、二十九年三月十三日第四区（名古屋）第五区（大阪）兼務、木曾川淀川の改修や低水工に尽力す、三十一年一月二十四日第四区（名古屋）土木監督署々長、三十八年四月一日内務技師名古屋土木出張所長と改名さる、四十年五月七日土木

局調査課長（一時名古屋所長や土木局工務課長兼）、四十四年四月十一日下関出張所々長となり、七年七月十日内務技監に進み、十三年三月二十五日退官す、正三位勲二等、大正十年土木学会々長、

昭和十二年九月三十日長府にて歿す、享年、七十三、長男忠次土木工学士内務技師、早世す。

此間港湾調査会、神戸港設備等の委員となり港湾に尽力し、欧米出張二度、支那出張四度（漢口居留地護岸、天津水害善後策のため）明治神宮造営、帝都復興院、道路会議等に尽力した。

氏は所長になる迄は木曾川淀川に勤務したが、淀川の改修計画は沖野博士を助けて之を作つた、又淀川の沈床工ケレップはデレーケの計画で作つて、其元附は低水位以上六尺であつたが、下流部深堀を生ぜるを以て二尺位に低下せしめて、好結果を得た。特に港湾には沖野博士と共に夙に興味を持ち関門海峡整理、関門港、神戸港を計画施工した。沖野博士の良き相談相手で、良き後継技監でもあつた。

氏は河川の水制沈床工や護岸石張は従来皆平滑丁寧に張込めるは、流水速度を増し、深堀を誘致して害あり、努めて粗面とし、且つ水制は柔軟工透過工とする様、極力説示された。又木工沈床の根固めも排斥された。

此等を実地に適用施工して、予（真田）は利根川で好結果を得て、爾来全国の河川に此等の方法の行はるるに至れるは、氏の一大功績であつた、予は河川改修の一般を沖野博士に教はり、水流制御は原田博士に教はり、此二人は諸先輩の内特に敬慕する方々であつた。

酒煙草共に好まれたが、チビリチビリ程度であつた。

丹羽鋤彦

本籍東京の人、明治元年六月十九日名古屋にて生る、二十二年帝大土木科卒工学士、（二十二歳）同僚より四

年年少であつた、大正四年二月九日工学博士。

学校卒業後直ちに内務省第二区（仙台）土木監督署に入り、技師試補となる（年俸七百円）、二十三年十一月二十九日仙台（北上川）や酒田（最上川）に居つた。二十四年八月十六日土木監督署技師第四区（大阪）勤務となり、二十五年三月十一日内務省桑名出張所勤務（木曾川従務）、二十七年十月一日第四区は名古屋となり名古屋に移る、二十九年五月十八日第五区（大阪）に転し、三十二年五月三十一日大蔵省税関工事部技師（横浜港）、大正二年七月二十九日神戸の設備委員、八年十一月四日退官す。其外大正八年日本水力（後の大同電力）に入る。大正十年六月一日東京市道路局長、兼河港課長となる、十三年十月三日東京市退職す。

氏は大阪在任中は淀川に、名古屋の時は木曾川に尽力し、横浜の時はケーソンを日本で最初に採用した。大正八年以来攻玉社工学校々長たり。

昭和三十年一月十八日東京にて逝去す。享年八十八、従三位勲二等旭日重光章、氏は謡曲、和歌に長ず。女婿鮫島茂土木工学博士、内務技師たりし。

岡崎芳樹

山口県周防の人、元治元年三月十四日生、明治二十二年帝大土木科卒工学士、大正十三年十二月二十四日工学博士。

二十二年八月三日内務省技師試補第三区（新潟）土木監督署勤務、二十三年三月二十二日新潟県嘱託（二四、三、五迄）、二十四年九月七日仙台にありし第二高等中学校教授、二十五年十二月十六日熊本県技師、二十八年八月十六日第二課長、三十年一月十八日土木監督署技師（第五区大阪）に復し、監督部、調査部直轄工事部、試

験係、後ち工務係主任、三十六年七月十三日淀川改修第二工区第三工区主任兼。三八、四、一官制改正内務技師と改名、土木局に転し監査課工務課治水課勤務、四〇、五、七監理課工務課、四二、四、二〇欧米出張。四三、一〇、一八治水調査会幹事。四四、四、一一名古屋土木出張所長。四五、一、一二土木局直轄工事課調査課、港湾調査会委員、六、一二、二七大阪土木出張所長となる。一三、三、二五退官。正三位勲二等、一四、一、四逝去、享年六十二。長男直樹早稲田建築科卒、相続す。早世す。

氏は土木局在勤中大正六年七月淀川大塚破堤の復旧に出張尽力す。又大阪在任中は淀川増補工事に尽力す。囲棋を好む。極めて潔癖家あでつた。退官後京都に住したが、歿せる時は丁度六甲苦楽園で囲棋中であつた。

渡辺六郎

東京の人、慶応元年六月二十五日生、明治二十二年帝大土木科卒工学士、大正八年六月二十八日工学博士。学校卒業後八月三日内務省に入り、内務技師試補第一区（東京）土木監督署勤務、十二月一日一年志願兵、二十四年八月十六日土木監督署技師第六区（久留米）勤務、二十七年十月歩兵少尉、三十八年四月一日内務技師、東京土木出張所兼土木局監査課勤務となる。三十九年五月三日大阪土木出張所に転じ、淀川改修に尽力す。土木局工務課兼、四十四年四月一日新潟土木出張所長となり、新潟港信濃川改修に儘力す。

大正十三年三月二十五日退官、正三位勲二等旭日重光章。大正十四年一月二十七日東京にて歿す。享年七十五、長男俊一家を嗣ぐ。

早田喜成

佐賀旧鍋島藩の人、元治元年五月八日生、明治二十二年帝大土木科卒、工学士

卒業後同年八月三日内務省に入り、第二区（仙台）土木監督署勤務、宮城県、福島県内の河川工事に従事す。（北上川阿武隈川）二十九年土木局に転じ、府県土木の監督に当る。四十一年退官す。正五位勲五等、大正三年二月十六日歿、享年五十才。

在官中には道路面保護に功あり、退官後は四十一年宇治川水力に入り、四十四年東京電燈に入り、桂川発電工事を完成した。また大の運動家で、東大のボートレースを始めた一人であつて、第一回より常に工科選手であつた。二男成雄土木工学士、横浜曳船会社長。

西尾虎太郎

広島県三原の人、慶応二年七月二十七日生、明治二十二帝大土木科卒、工学士、

卒業後直ちに内務省技師試補となり、第四区（大阪）土木監督署の桑名派出所附となり、木曾川工事に従事す。二十四年八月土木監督署技師となる。二十五年四月東京市技師に転じ、水道の調査設計をなす。その間東京砲兵工廠の水道および仙台上下水道の設計嘱託となる。三十一年十二月大阪築港に入り、犬島採石工場主任となる（三十六年四月十八日まで）後鹿児島港、東京水力電気、東京下水道、横浜港設備工事等の調査を依嘱せらる。四十一年十二月十六日海軍技師となり、呉鎮守府建築科に入り、四十四年二月横須賀建築科で軍港防波堤を担当す。大正十年十二月五日横須賀海軍建築部長となる。十二年六月二十八日歿、享年五十八、正五位勲四等、長男辰吉土木工学士内務技師嗣ぐ。法政大学教授。

三池貞一郎

福岡県柳川藩の人、元治元年八月十五日生、明治二十三年帝大土木科卒、工学士。

校門を出て直ちに内務省第四区（大阪）土木監督署に入り、桑名工営所にて木曾川に従事す。二十六年頃第五区（大阪）土木監督署に転じ、淀川改修の調査を原田貞介と共になし、二十七年六月沖野博士の改修意見書となり、内務大臣に提出となつた。二十九年その計画は帝国議会の決議を得て、同年度より工事に着手することとなつた。三十一年二月三日淀川改修第一工区（新淀川工区）主任となり、我国最初の陸上諸機械使用土工に辛苦し、その功績大である。四十年四月十八日欧米各国出張命ぜられ、五月七日新潟土木出張所勤務となり（大阪土木出張所兼務）四十二年四月一日信濃川改修大河津分水の主任となる。

四十四年四月二十一日大阪土木に転じ（新潟土木兼務）同年六月一日淀川下流改修主任、大正六年十月十日支那天津水害調査のため、沖野技監、原田貞介、坂本助太郎と共に出張す。

大正六年十二月二十七日仙台土木出張所長となり、北上川、最上川改修に尽力す。十三年三月二十五日退官す。従三位勲三等、昭和二十六年十二月十六日郷里にて歿す。享年八十八。

氏は極めて現場的で、風采などは一切構わなかつた。著者（真田）は沖野技監や三池氏には最初より仕え永く大変お世話になつた。氏は煙草はやつたが、酒は飲まなかつた。なかなかの健脚家で淀川従事中、明治三十六年淀川大出水、丁度奈良に出張中であつたが、大阪よりの急電により堤防危険を知り、夜十時より徹夜歩行して朝までに大阪に帰着した程であつた。趣味は球突等であつた。

退官後大阪で、大阪ガス会社の嘱託、鴻池組の顧問をした。長男鎮浪土木工学士、内務技師たりしが現在鴻池組にあり。

市瀬恭次郎

丹波篠山の人、慶応三年六月二十三日生、明治二十三年帝大卒工学士、明治四十四年十一月十七日工学博士。第六区（広島）土木監督署勤務、管内県土木監督に従事す。大正二年六月七日仙台土木出張所長となり、北上川、阿賀野川改修に尽力す。大正六年十二月二十七日土木局調査課長、八年六月二十六日神戸所長に転じ、神戸築港に尽力す。十三年三月二十五日内務技監となる。昭和三年八月十五日在官中東京にて病歿、享年六十二。

昭和二年土木学会々長。正三位勲二等旭日重光章。趣味謡曲、息元吉応用化学工学博士、通産省工業試験所長、相続す

名井九介

山口市吉敷の人、明治二年五月五日生、二十五年帝大土木科卒、工学士、大正八年六月二十九日工学博士。卒業後七月二十八日土木局雇、第二区（仙台）土木監督署勤務、十一月三十日一年志願兵に入り、二十六年十月三十日第四区（名古屋）に転じ、桑名派出所におり、後名古屋に移つた。三十年三月十一日福井県工師嘱託（約一年七ヶ月間）名古屋にては木曾川改修監督に当り、三十三年九頭竜川改修主任となる。四十一年三月欧米各国へ出張、四十四年四月十一日東京土木出張所に転じ、工務部長として利根川、渡良瀬川、荒川、多摩川改修に尽力す。大正七年一月二十八日北海道庁初代勅任技師となり、石狩川改修に尽力した。その間土木、農林等技術官の統一融和に大功あり、昭和二年六月十四日退官、昭和十九年一月二十三日東京にて歿す。享年七十六。長男清、採鉱科工学士早世し、二男は親戚を継がしめ、三男相続す。正三位勲三等。昭和七年土木学会々長。

昭和四年より東京工学校々長に推され、また雨竜電力、釧路港にも顧問として尽力した。

氏は沖野博士に愛せられ、北海道に転出する時は、餞別として秘蔵金時計を送られた。極めて面白き人であつ

て、今蜀山人とも云える。狂歌、俳句を能くし、旅行中到るところで駄句を拈り、当意即妙のものが多かつた。氏のあるところ常に春風駘蕩の気溢れ、座中何人も喜んだ。北海道時代も大久保彦左衛門と称され、名物男であつた。三楽道人と号し、酒、碁、謡曲を好み、みな相当上達しておつた。土木と云わず法科人と云わず、先輩にも後輩にも愛好せられ、世にも稀なる人物であつた。

予（真田）は氏により人間学に得る所多かつた、謹謝するところである。道庁在職中軽き中風を病み、間もなく退官し、東京に帰つたが、家では酒を禁止せられたが、外では好んで飲んだ。病気を苦にせず十数年も平気で残年を楽んだ。

比田孝一

東京府の旗本士族で、明治元年十一月二十八日生、二十六年帝大土木科卒、工学士。

卒業後内務省第六区（広島）土木監督署に入り、三十八年三月三十一日官制改正廃官、愛知県技師となる。三十九年七月統監府技師として中原貞三郎一行に加わり、朝鮮道路改良に従い、群山方面を受持つた。四十一年頃帰朝、四十三年十一月十日宮城県土木課長となる。四十四年四月十一日内務省に復帰し、東京土木出張所荒川改修主任となる。大正七年五月二十二日東京第二土木出張所長兼第一同上、八年六月二十六日土木局調査課長、十二月二十四日第二技術課長、十年六月九日治水調査会委員、十三年三月二十五日退官、従三位勲三等。昭和四年一月十一日歿、享年六十二。

氏は酒豪であつた。また謡曲もやつた。性濶達無邪気で青竹を割つた如し、大声一喝するかと思うと、忽ち温和に復すと云ら気質で、人に愛された。死因も電車中脳溢血を起し、四日にして永眠という程で、惜しいことで

あつた。子なし、甥正は土木工学博士、運輸省港湾にあり。

安達辰次郎

加賀大聖寺の人、明治元年八月二十八日生、二十七年帝大土木科卒、工学士。

初めより内務省第三区（新潟）土木監督署に入り、のち第一区東京に転じ、監督部勤務、のち土木局製図課に転じ、三十八年三月三十一日内務技師と改名、土木局調査課勤務、四十四年四月東京土木出張所渡良瀬川改修主任となる。大正七年七月十日下関土木出張所長となり、十三年十二月退官、昭和十一年二月二日東京にて歿す。享年六十九。従三位勲三等。

趣味多く義太夫、囲棋、和歌、書も画も出来た。

青木良三郎

明治二十七年帝大土木科卒業、工学士

卒業後直ちに内務省に入り、第四区（名古屋）土木監督署木曾川改修に従事す。船頭平閘門主任となり、大正六年九月二十九日退官す。同日歿す。従四位勲五等、生国生年不明。

南斉孝吉

山形県上花沢の人、慶応三年四月十七日生、明治二十七年帝大土木科卒工学士。

卒業後直ちに内務省第六区（久留米）土木監督署雇となり、順次技師に進み、調査部監督部勤務、三十八年韓国に出張調査をなす。同年三月三十一日官制改正廃官となり、同時に嘱託として、遠賀川改修計画をなす。翌年五月十一日内務省大阪土木出張に帰り内務技師として、七月一日遠賀川改修主任となり、大体竣工の後、大正六

年十一月十四日退官す。正四位勲四等、歿年不明。

長沢　忠

但馬国府の人、明治五年頃生、明治二十八年帝大土木科首席卒、工学士。小学時代より常に首席。卒業後内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、二十九年十月淀川改修工事用の諸機械買入のため、岡嵐信、川上新太郎と共に欧米に出張す、帰朝後淀川改修第二区第三区（京都府滋賀県部内）主任として、新宇治川、瀬田川工事を担任したが、不幸病を得て、三十六年七月淀町在住中歿す、享年約三十二、惜しき人であつた。

謡曲を嗜み、予（真田）は大阪工師会で共に毎週稽古した、また玉突もやつた。

今泉安之助

千葉県関宿の旧幕臣の子、明治元年五月二十六日生、二十八年帝大土木科卒、工学士。

同年八月二日内務省第三区（新潟）土木監督署に入り、三十三年九月十日庄川改修（伏木港も）の主任となり、三十八年四月一日官制改正内務技師新潟土木出張所と改名、四十四年四月十一日仙台土木出張所勤務、大正七年五月二十二日秋田土木出張所創設と共にその所長となり、雄物川、最上川改修に尽力す。十三年十二月一日退官。昭和十四年四月二十四日歿、享年七十二。従三位勲三等。

安芸杏一

徳島の人、明治六年二月四日生、二十九年帝大土木科卒、工学士、大正九年四月二十七日工学博士。

学校卒業後、直ちに第三区（新潟）土木監督署に入り、信濃川々口突堤工事に従事し、四十年以後信濃川改修川口工事主任として、これを完成せしめ、大正二年土木局、大正十年五月一日横浜土木出張所長となり、横浜港、

清水港に尽力す。其間欧米出張もした。昭和四年三月二十三日退官、横浜に在住、氏は退官後港湾協会のため、全国港湾の調査計画をなした。正三位勲三等、長男皎一も土木工学博士内務技師、後東大教授。二男法学士三菱銀行、五男商大卒小野田セメント。

中川吉造

大和高田の人、明治四年生、二十九年帝大土木科卒、工学士、大正十四年五月二十五日工学博士。

卒業するや直ちに内務省第一区（東京）土木監督署に入り、三十三年以来利根川改修第一期、第二期改修主任として、取手以下全部氏の手に成る。大正初年頃欧米各国へ出張す。大正八年六月二十六日東京第二土木出張所長、十二年六月一日第一、第二合併東京土木出張所長となる。昭和三年九月十三日内務技監に進む、九年五月十一日退官、この間三十九年間一歩も東京の地を離れず、念願利根川を離れず、利根川の主であつて、功績著大である。正三位勲二等、昭和五年土木学会々長、十七年八月一日東京渋谷にて歿す、七十二。

氏は球突は上手であつた。酒、煙草は少量、先妻は芳川子爵の女にて、児一人可久郎法学士藤田組合名会社、後妻には子なし、昭和二十年戦災にて死す。

宮川　清

熊本の人、明治三年九月二十九日生、二十九年帝大土木科卒工学士。

卒業後直ちに第五区（大阪）土木監督署に入り、淀川改修第一工区新淀川開削に従事し、三十三年欧米巡遊、四十四年四月土木局に転じ、沖野技監の下に調査、編纂係となり、年報や改修工事誌を作る。

大正七年五月退官、従四位勲五等、東京現住、趣味は初め謡曲後俳句、妻線子但馬人、昭和三十一年死去。男児多し。

小林泰蔵

鹿児島県の人、明治四年生、二十九年帝大土木科卒、工学士、四十年十二月十八日工学博士。三十一年二月十九日大阪築港技師となり、沖野工事長の下に浚渫工場主任となり、四十三年一月二十七日大阪市水道課長となる。大正二年十月十七日日歿、享年四十三。息亮相続す。

池田円男

鳥取の人（後本籍東京都）、明治四年八月十五日生、三十年東大土木科卒、工学士。卒業後直ちに第五区（大阪）土木監督署に入り、淀川改修第一工区新淀川に従事す。三十三年頃愛知県技師となり、後ち内務省土木局に復帰し、大正十一年七月二十六日近藤虎五郎の後任として、第一技術課長となり、十三年十二月一日退官す。従三位勲三等、昭和六年十一月八日東京大森にて歿す。享年六十一。

島重治

長崎県の人、明治五年五月七日生、三十年東大土木科卒工学士。三十年九月二日大阪築港に入り方塊工場主任となる、三十八年七月二十八日退職、韓国燈台局長となる。四十四年十月内務省に入り、新潟土木出張所信濃川の分水、千曲川改修主任となる。大正十一年五月十日大阪府土木課長、十三年十二月十二日内務省に復帰し、土木局第一技術課長となり、昭和三年四月三十日退官す。現在伊勢松坂に住す。長男某法学士。

前川貫一

近江の人、明治六年六月二十九日生、三十年東大土木科卒、工学士。

直ちに内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、間もなく八月十二日第三区（新潟）に転じ、信濃川改修の調査と府県土木の監督係となる。四十二年五月東京土木出張所に転じ、利根川第三期改修の計画をした。大正三年十二月一日江戸川改修主任、八年九月一日中川主任、同年十一月十三日沖野博士の勧めにて休職にて日本水力会社に入る。会社は成立しなかつたので、十年一月三十一日内務省に帰り、土木局技術課に入る。十二年五月二十一日名古屋土木出張所長、昭和三年六月十三日土木局第一技術課長となる。九年五月十一日退官。昭和三十年一月十三日熱海伊豆山宅で歿す。趣味は謡曲、享年八十三。正三位勲二等。長男国雄建築工学士、設計事務所経営、二男分家、三男法学士、日本銀行。

原静雄

東京の人、明治三十一年東大土木科卒、工学士。卒業後内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、約一年にて第七区（福岡）に転じ、筑後川改修に従事す。大正三年四月二十七日愛知県土木課長となる。名課長と云われた。大正八年四月三十日一級俸、のち朝鮮へ転任した。昭和の初横浜市港湾部長となる。昭和二十五年三月二十四日東京にて歿す。従四位勲五等、

丸田覚

東京の人、明治三十年東大土木科卒、工学士。明治三〇・九・二―三三・八・二九間は大阪築港修船々渠工場主任たり。後横浜船渠会社に入る。昭和六年頃死。

田川正二郎

大阪府の人、明治九年三月十六日生、三十一年東大土木科首席卒、工学士。

八月十五日大阪築港に入り、突堤工場主任、四十一年欧米各国出張、築港大略竣工の四十四年三月初代大阪市港湾部長となり、大正三年一月退職す。のち三井鉱山会社に入り参事となり、また合名会社、三井物産、東神倉庫の顧問、神岡水力常務取締等をなす。昭和十二年十月より十四年十月まで北海道炭鉱の洞爺湖水力電気所長、十六年帝国燃料の顧問となり、三井のため尽力した。昭和二十一年一月十六日東京目黒の宅にて病歿す。享年七十一。男児多し、妻梅子春翠と号し南画をよくす。東京住。

森垣亀一郎

但馬豊岡の人、明治七年三月二十二日生、明治三十一年東大土木科卒工学士、大正八年十二月十二日工学博士。卒業後同年八月十五日大阪築港に入り、三十四年十二月十四日桟橋工場主任となり、三十六年九月二十日犬島採石工場主任となる。築港大略竣工後三十九年四月一日退職す。同年四月十八日大蔵省技師となり、臨時建築部神戸支部に入る。四十年六月十日繋船壁工場主任となる。六月十五日欧米各国出張、四十三年四月六日防波堤工場主任となる。大正八年四月一日内務技師に転じ、十二年六月十八日退官、従四位勲三等。

昭和九年一月二十三日歿。享年六十一。退官後は神戸市役所技師長、港湾部長、土木部長、都市計画委員長等を勤め神戸市に尽力す。

真田秀吉

広島県三原の人、明治六年五月五日生、三十一年東大土木科卒、工学士、大正九年四月二十七日工学博士。学校卒業後内務省第五区(大阪)土木監督署に入り、淀川改修第一工区新淀川開削に従事す。三十八年四月一日官制改正内務技師、大阪土木出張所勤務と改名さる。同日淀川第二工区主任となり四十年五月十六日淀川下流改

修淀川工区主任兼、新淀川の水制工を作る。四十四年四月十一日東京土木出張所に転じ、翌年四月一日利根川改修第三期工事の田中工区主任、大正三年五月十六日より約十カ月欧米出張、七年五月二十二日第三期主任、十年十月五日東京土木出張所工務部長兼庶務部長、利根川橋架橋主任、十三年三月二十五日大阪土木出張所長、昭和二年十月八日港湾調査会大阪港委員、三年九月十三日東京土木出張所長に転ず。九年五月十一日退官。正三位勲二等。

昭和八年土木学会々長、また同会の日本土木史及外人功績編纂副会長として編纂に尽力す。九年十一月朝鮮総督府依頼の洛東江破堤善後策のため渡鮮、十六年五月日本学士院日本科学史土木編委員として著述に力を致す。その他河川協会、港湾協会、道路改良会、全国砂防協会の各特別委員または顧問、復興建設技術協会中国支部長、中国、四国建設機械運営協会長、長野県、川崎鉄網工場各顧問、利根川治水協会副会長等々、趣味は玉突は少々酒、煙草も少々、晩年書画を弄し、また漢詩を拈る。

主として治水のため、殆んど一生を捧げた。長男弘採鉱工学士、通産省にありし。

田賀奈良吉

鳥取の人、明治四年十二月十三日生、三十一年東大土木科卒、工学士。

卒業後内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、監督部勤務、三十三年九月徳島県の土木課長、三十九年頃内務省大阪土木出張所に復帰し、四十年高梁川改修主任となり、これを竣工せしむ、大正七年五月土木局に入り、七月十三日埼玉県土木課長、次で台湾総督府土木課長となる。従三位勲三等。

退官後は東洋拓植会社嘱託（昭和二、一〇、二二—八、八、八）となつた。昭和十年十二月二十六日東京にて歿す。享年六十五。男秀和土木工学士、運輸省港湾部に在り。

片山貞松

熊本の人、明治六年十一月二十九日生、三十一年東大土木科卒、工学士。

卒業後直ちに内務省第七区（福岡）土木監督署に入り、監督部勤務、のち和歌山県土木課長となり、三十九年中原氏等と共に朝鮮総督府技師となり、渡鮮し、道路改良に従事す。四十三年内務省に復帰し、土木局附となり、約一年遠賀川に行きのち利根川第三期改修尾島工区主任となる。大正七年荒川上流改修主任、十二年六月鳥取土木出張所新設され、その所長となり、十三年十二月下関土木出張所長に転ず。

昭和四年三月退官。従三位勲三等。昭和十五年七月十九日郷里熊本で歿。享年六十八。謡曲を好み、同僚中もつとも上手であつた。熊本では高工講師であつた。

田中吉二

鹿児島県の人、明治七年生、明治三十二年東大土木科卒、工学士。

卒業後直ちに内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、淀川改修第一工区新淀川開削に従事し、四十年より吉野川改修主任兼阿波砂防工事主任として吉野川は大体竣工せしむ。大正六年十二月八日大阪府技師となる。大正九年八月八日歿、享年四十七。従四位勲五等。

金森鍬太郎

名古屋の人、明治七年十二月生、三十三年東大土木科首席卒、工学士。　大正六年十二月二十七日工学博士。

卒業後直ちに内務省第五区(大阪)土木監督署に入り、淀川改修第三工区瀬田川従事、後主任となり、洗堰浚渫等を完成せしむ、大正に入り土木局第一技術課に転じ、大正十三年三月二十五日第二技術課長となる。正四位勲三等。

昭和二年一月二十六日在官中東京にて歿す。享年五十四。相続人長男賀雄。

阪本助太郎

仙台の人、明治七年十月十二日生、三十三年東大土木科卒、工学士、昭和六年七月八日工学博士。

卒業後直ちに内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、淀川改修第一工区新淀川開削に従事す、四十年五月八日第一工区主任、四十四年四月十一日東京土木出張所に転じ、同年十月三十一日利根川第三期改修栗橋工区主任、大正二年六月七日栗橋機械工場主任兼（八、一まで）三年一月二十八日（四、三、一迄）田中工区主任代理（真田秀吉欧米出張中）六年十月十日支那天津水害調査のため出張（沖野技監、原田貞介、三池貞一郎と共に）六年十一月三十日大阪土木出張所へ転じ、同年十二月十一日吉野川改修主任兼阿波砂防工事主任、八年二月一日淀川改修増補主任（一〇、一一、一五まで）八年四月一日淀川下流改修主任兼（一〇、一一、一五まで）十年八月二十二日欧米各国出張。十三年三月二十五日神戸土木出出張所長、四年七月港湾調査会神戸港委員、昭和二年十月八日同浦戸港委員、三年九月十三日大阪土木出張所長、五年十二月十日港湾調査会和歌山港委員、九年五月十一日退官。従三位勲三等。退官後阪神上水道組合長、昭和十九年十一月十四日歿。享年七十一。長男雅雄土木工学士早逝、二男信雄土木工学士運輸省港湾にあり。

熊谷直道

宮城県の人、明治九年四月十二日生、明治三十三年東大土木科卒、工学士。

卒業後内務省第五区（大阪）土木監督署に入り、淀川改修第一工区毛馬閘門工場主任。大略竣成まで居り、三十九年支那漢口居留地護岸工事へ転出す。その後大倉組に入りたり、従六位。歿年不明。

新開寿之助

福岡県築上郡大平村土佐井の人、明治六年五月二十七日生、明治三十三年東大土木科卒、工学士。

卒業後新潟県技師となり、四十年頃以後内務省新潟土木出張に入り、信濃川改修大河津分水の開削工事に従事し、竣工まで居り、のち千曲川改修主任、大正十三年三月二十五日新潟土木出張所長となる。昭和二年十二月十三日退官。従三位勲四等、昭和二十年三月十八日歿、享年七十三。

野村　年

名古屋の人、明治三十三年京都大学土木科卒工学士。

卒業後内務省に入り、第四区（名古屋）土木監督署木曾川改修に従事し、北上川改修主任に転じ、のち最上川改修主任となる。大正十三年頃欧米出張中イタリヤにて自動車事故のため客死す、生年その他不明。

坂本丹治

群馬県の人、明治六年十一月九日生、三十四年東大土木科卒業、工学士。

卒業後内務省第三区（新潟）土木監督署に入り、庄川改修に従事（伏木港も）のち神通川改修主任、その後新潟港に従事す、大正十三年三月二十五日仙台土木出張所長兼秋田土木出張所長、昭和九年五月十一日退官、従三位勲三等。

退官後東京荻窪宅に居つたが、昭和二十五年十月三日郷里にて歿、享年七十八、長男修嗣ぐ、酒は大分好きであつた。煙草はやらぬ、晩年漢詩も少々やつた。菊花栽培は得意であつた。

徳田文作

山口県の人、明治十年五月二十六日生、三十五年東大土木科卒、工学士。

卒業後内務省第四区（名古屋）土木監督署に入り、九頭竜川改修に従事し、四十一年より、那覇港修築主任としてこれを完成し、四十四年四月十一日内務省に帰り、五月二日欧米各国出張、大正元年北上川改修主任となる。同五年久原房之助計画の戸畑製鉄所に招かれ、これに転出す（これは八幡製鉄所に合併す）これは暫時であつてその後若松築港主任として永年勤続す。現在山口県に退隠す。趣味碁等

野田孝一

山口県の人、明治三十五年東大土木科卒、工学士。

卒業後内務省第一区（東京）土木監督署に入り、利根川第一期改修佐原方面浚渫に従事し、四十三年以後関門海峡浚渫に従事す。大正九年一月六日在官中歿。正五位勲六等、生国、生年等不明。

荒井釣吉

埼玉県鴻巣の人、明治十二年五月六日生、明治三十六年東大土木科卒、工学士。

卒業後内務省第一区（東京）土木監督署に入り利根川第二期改修（佐原取手間）に従事し、大正三年欧米各国出張、六年五月雄物川改修主任となり、八年十月二十日支那遼河工程局に聘せられ、同年十二月二十一日満鉄汽車衝突の事故により客死す。痛歎の至である。享年四十一。正五位勲六等。

青山士

静岡県中泉の人、明治十一年九月二十三日生、三十六年東大卒、工学士。

学校卒業後、直ちに米国ニューヨーク、セントラル、エンド、ホドソンリバー鉄道に入り、測量に従事し、三

十七年六月一日より四十五年一月九日までパナマ運河の測量設計に従事し、四十五年二月二十九日内務技師となり、東京土木出張所荒川改修に従事す。大正四年十月三十日岩淵水門工場主任、七年七月二十二日荒川主任となる。昭和二年十二月十三日新潟土木出張所長、九年五月十一日内務技監に進む、十一年十一月十七日退官す。十年土木学会々長。従三位勲三等。爾来郷里中泉に住居す。趣味は時々俳句も詩も作る。酒、タダコ飲まず。

市　来　尚　治

鹿児島県加治木の人、明治九年八月八日生、三十六年東大土木科卒業、工学士。

校門を出て後、渡島水電会社に入り、大正初年内務省東京土木出張所に入り、利根川荒川の改修に従事し、のち大阪土木出張所に転じ、吉野川改修主任、その後大正十三年頃復興局横浜出張所長となる。従五位勲六等。昭和八年四月一日東京にて歿、享年五十八、中々の酒豪で、時に大気焔を吐いた、快男子であつた。

村　幸　長

金沢の人、明治十二年六月二十九日生、三十七年京大土木科卒、工学士。

初め朝鮮総督府に入り、清津土木出張所長として羅南港その後鎮南浦港に従事す。明治四十四年七月五日内務省に入り、渡良瀬川改修に従事し、のち土木局第一技術課に転じ、昭和四年三月下関土木出張所長となる。同年四月八日歿、享年五十一。従四位勲四等。長男幸雄土木工学士、建設省にあり。

並川熊次郎

大阪府三島郡芥川村の人、明治十二年十一月二十七日生、三十九年京大土木科卒、工学士。

卒業後直ちに内務省大阪土木出張所に入り、淀川改修毛馬閘門に従事す。四十一年頃淀川下流改修毛馬桜宮間

の浚渫護岸に従事し、大正元年頃北上川改修に転じ、五年同主任となる。昭和三年九月十四日退官、正五位勲四等。二十年一月六日京都府向日町にて歿す、享年六十七。

大　岡　大　三

山口県萩の人、明治十六年生、明治三十九年京大土木科卒、工学士。

初めは埼玉県土木課長たりしが、大正の初、内務省東京土木出張所に入り、中川および庄内古川改修主任となる。大正十三年三月二十七日復興局横浜出張所に転じ、　　年退官す。正四位勲三等旭日章。退官後昭和六年四月二十四日横浜市土木局長となり、九年三月九日同市助役に進み、十六年二月十日辞任す。二十年七月七日歿す。享年六十三

木　津　正　治

富山県新湊の人、明治十五年生、四十年東大土木科卒工学士。

学校卒業後内務省下関土木出張所に入り、関門海峡浚渫整理工事に従事し、のち主任となり、下関、門司港主任、昭和四年三月二十三日横浜土木出張所長となり横浜、清水港に尽力す。十一年十一月七日退官、その後神奈川県京浜運河顧問となる、十三年八月十五日横浜にて歿、享年五十七。従三位勲三等。

辰　馬　鎌　蔵

大阪府の人、明治十五年二月十三日生、四十年京大土木科卒、工学士。

卒業後内務省大阪土木出張所に入り、淀川改修第三工区（瀬田川）に従事し、一年志願兵終了後四十四年四月十一日遠賀川改修芦屋工場主任、大正五年二月二十五日東京土木出張所に転じ、利根川第三期改修田中工区（取

手、境間）に従事、七年五月多摩川改修主任としてこれを竣工せしめ、十三年六月欧米出張、昭和元年十月荒川上流改修主任、二年十二月帰所、三年四月三十日名古屋土木出張所長、九年五月十一日東京所長、十一年十一月十七日内務技監に進み、十四年六月六日退官、従三位勲二等。昭和十三年土木学会々長、現在東京世田谷区住。退官後広島県嘱託として工業地帯造成、東京市水道の顧問たりし、晩年共栄興業社長たり、趣味は碁、謡曲等。

高西敬義

水戸の人、明治十六年九月七日生、四十年京大土木科卒工学士、大正十三年三月四日工学博士。

卒業後大蔵省に入り、神戸港第一期修築設備工事に従事し、大正八年三月内務技師として同港第二期工事主任となる、昭和三年十月二十五日神戸土木出張所長となり、神戸港小松島港に尽力す。九年五月十一日大阪出張所長となり淀川、木津川、大和川等に尽力す。十四年六月六日退官。従三位勲二等

退官後北支塘沽新港築造局長となり、また多くの会社に関係す。大阪市天王寺区に現住、趣味は謡曲等で、書も画も上手、晩年古事探究に耽る。

大久保清長

三重県亀山の人、明治十五年八月十三日生、明治四十年東大土木科卒業、工学士。

学校卒業後内務省土木局に入り、四十四年頃仙台土木出張所北上川改修従事、その後岩木川主任となる。ついで欧米出張をなし、昭和四年三月二十五日退官す。正五位勲四等、その後甲府工業学校長となる、十三年七月二十四日甲府にて歿す。享年五十七。

金古久次

福島県の人、明治十四年五月二十四日生、四十二年東大土木科卒、工学士。

学校卒業後内務省東京土木出張所に入り、利根川第二期改修に従事し、大正十二年荒川上流改修主任となり、同年欧米出張、昭和四年八月下関土木出張所長となる。九年五月十一日名古屋所長に転ず、緑川、筑後川、大淀川、大野川、木曾川に尽力す、十三年十二月三日退官、従三位勲三等、退官後上海恒産会社重役、住友顧問たりし、昭和二十年六月八日歿。享年六十五。

谷口三郎

広島県二十日市の人、明治十八年四月七日生、四十二年東大土木科卒、工学士。

卒後北海道庁に入り、小樽、留萌港付、札幌土木派出所長を経て、大正四年七月三日内務技師となり、土木局監理課勤務、次に第一技術課に入る。七年五月二十二日大阪土木出張所に転じ、同年八月二日淀川改修増補主任となる。昭和九年五月十一日土木局第一技術課長に転じ、十一年十一月十七日東京土木出張所長、十四年六月六日内務技監に進み、十七年三月二十五日退官。正三位勲二等。

在官中大正十三年ブラジルへ出張す。十六年土木学会々長、在官中拓殖技師、鉄道監督局技師を兼ね、退官後支那黄河処理嘱託、二十三年十月一日帰朝、二十六年五月一日建設機械化協会々長として尽力す。その他多方面に会長または顧問として力を致した。酒は豪のもので、体力強健で、ブラジルでもマラリヤに罹らなかつた。昭和三十二年八月十三日麻布の宅で歿す。享年七十三。

福田次吉

金沢市の人、明治十九年九月二十日生、四十二年東大土木科卒、工学士。

卒業後内務省東京土木出張所に入り、間もなく欧米各国出張、後利根川改修、荒川改修に従事し、大正二年二月四日土木局第二技術課長となり、九年五月十一日仙台土木出張所長となり、十一年十一月七日退官す。酒は好きで、晩年は漢詩を初めた。従三位勲三等。現住金沢市。長男秀夫、土木工学博士、鹿島建設にあり。

牧野雅楽之丞

宮城県の人、明治十六年一月二日生、四十二年東大土木科卒、工学士。

卒後約二ヶ年東京市水道拡張調査をなし、四十四年末内務省東京土木出張所に入り、利根川第二期改修に従事し大正十三年十二月一日土木試験所長、昭和二年五月三十一日復興院技師に転じ、技術試験所長となる。のち内務局土木局国道係となり、昭和九年五月十一日下関土木出張所長となり、十一年十一月七日退官す。従三位勲三等。

その後京都市土木局長たりし、現在海外土木興業副社長たり、趣味囲碁等、東京都住。

山内喜之助

福井県の人、明治十七年四月十三日生、四十二年東大土木科卒、工学士。

卒後東京市水道拡張調査員となり、四十四年十二月二十八日内務省に入り調査課。大正三年四月大防土木出張所に転し、淀川下流改修に従事し、その後加古川改修主任としてこれを竣工せしめ、また太田川（広島県）改修、旭川改修主任となり、神戸港に従事し、昭和九年五月十一日神戸土木出張所長となる。十一年九月二十日神戸にて歿す。享年五十三。従四位勲五等。趣味は謡曲であつた。長男一郎土木工学士、建設省にあり。

平井新六

茨城県竜ヶ崎の人、明治四十二年東大土木科卒、工学士。

学校卒業後直ちに内務省名古屋土木出張所に入り、敦賀港修築を担任、大正元年東京土木出張所に転じ、利根川第三期改修田中工区に従事し、大正三年青森港に転じ昭和五年四月二十八日銚子漁港事務所長となり、十八年八月二十日退職、その後千葉県嘱託として二十一年四月まで県の港湾に尽力す。現在千葉に住す。

物部長穂

秋田県の人、明治二十一年七月十九日生、四十四年東大土木科首席卒業、工学士。大正九年四月二十七日工学博士。

卒業後内務省土木局調査課に入り、荒川、鬼怒川等の改修計画をなす。昭和二年五月三十一日土木試験所長となり、東大教授を兼ぬ。十一年十一月七日内務省を退き、専ら東大教授に没頭す。地震学水理学に名あり。

昭和十六年九月九日東京にて歿、享年五十四。従三位勲三等。

寛斌治

岡山県の人、明治十八年三月二十三日生、四十五年東大土木科卒、工学士、卒後、内務省東京土木出張所に入り、利根川改修に従事し、中川改修主任、荒川上流改修主任となる。昭和八年満州国の交通局技正、帰朝後昭和十一年十一月七日神戸土木出張所長、十四年六月六日退官。従四位勲四等旭日章、退官後河川協会技術委員となる。東京都現住。

蒲孚（林、土）

東京の人、明治二十一年二月十七日生、四十四年東大林学科卒林学士、大正三年東大土木科卒工学士。

卒後内務省東京土木出張所に入り、日光の大谷川、稲荷川、富士川の左支笛吹川小支日川、右支御勅使川、酒

勾川、花水川、早川の砂防主任たり、本邦のコンクリート砂防堰堤の基礎を作つた。また安倍川、狩野川改修の主任たり。昭和十三年七月二十日新潟土木出張所長、十七年三月二十五日退官。正四位勲四等。現在日本測量会社々長、東京駒込動坂に住す。

赤木正雄（林）

兵庫県の人、明治二十年三月二十四日生、大正三年東大林学科卒、林学士、昭和十年農学博士。

学卒後、内務省大阪土木出張所に入り、淀川上流下田上砂防、四年四月吉野川曾江谷、日開谷砂防に従事す。のち欧米に留学して後土木局で砂防事務を司り、昭和十三年八月十二日第三技術課長（砂防）となる。十六年九月六日退官。正四位勲三等、後参議院議員となる。全国砂防協会を起しその理事として尽力す。砂防会館を建築しその理事たり。東京世田谷に現住。

川上新太郎（機）

東京府の人、安政五年六月二十七日生、明治十五年東京大学機械科卒、理学士。三十二年三月二十七日工学博士。

東京に機械工場を経営す、二十九年内務省第五区（大阪）土木監督署嘱託となり、二十九年十月淀川改修用諸機械買入のため岡崎信、長沢忠と欧米に出張す。三十八、九年以後は内務省嘱託となり大正五年頃まで内務省河川港湾諸機械製造修理の監督をなした（非常勤）正七位、昭和四年六月十九日歿す。享年七十二。息、太郎家を継ぐ。

本間源兵衛（機）

北海道の人（後東京移籍）、明治十二年五月八日生、三十五年東大機械科卒、工学士。

初め浦賀船渠会社技師たりしが、大正元年内務省に入り、下関、千住機械工場主任として尽力し昭和七年二月二十九日退官。爾来永く内務省及全国各府県の嘱託として浚渫船等製造買入の事に尽力す。昭和二十六年七月二十五日東京にて歿す。享年七十三。正四位勲三等。趣味は囲碁にて中々上手であつた。長男仁、土木工学博士東大教授である。

加納盛吉（機）

尼崎の人、明治十一年二月十一日生、明治三十六年東大機械科卒業、工学士。

卒業後、内務省に入り、第三区土木監督署（新潟）信濃川改修の大河津機械工場主任、大正四年大阪土木出張所機械係長兼光立寺機械工場主任たり、十二年一月三十一日退官、正五位勲五等、退官後は兵庫県嘱託等となる。昭和二十五年十月十一日歿す、享年七十三。

嘉納謙作

兵庫県の人（？）安政万延頃生、何校卒業か不明、機械技師

明治三十一年三月十一日、大阪築港に入り、機械工場主任となる。のち大正十年頃内務省東京土木出張所に入る。同十二年頃退官、昭和五年三月十九日歿す。享年約七十二。

田中捨之丞（機）

広島県の人、慶応二年二月十七日生、学校名及卒業年不明、機械技師

初め大阪砲兵工廠技師であつたが、明治三十年第五区（大阪）土木監督署に入り、淀川改修光立寺機械工場主

任として永く勤務す。正六位勲六等、歿年不明。

高松政正（化）

鳥取の人（本籍東京府）、安政六年七月二十二日生、明治十六年工部大学校卒業（化学科）工学士

明治三十年より内務省第五区（大阪）土木監督署嘱託として永年勤続し、工事用セメント試験を掌り、（大阪築港も兼務した）昭和初年頃内務省退職、昭和十二年七月三十一日摂津箕面村にて歿、享年七十九。正六位勲六等。

（四）省内、土木試験所、河川、砂防、港湾工事の技師

明治初年以来内務省直轄工事や調査計画及府県土木の管理に尽力した技師は多数であるが、これ等は寒暑を厭わず、孜々として働いた人々であつて、忘れてはならない。茲に記して記念とする。

土木局（明治四十年調査課監理課設置以前は多くは不明。（終戦以後の人は省く）真田著土木行政冊子三〇頁を見よ）

	卒業年						
監 古市公威	明治一二	南部常次郎	二〇	安達辰次郎	二七	島重治	三〇
宮ノ原誠蔵	外	岡崎芳樹	二二	蔵重哲三	二八	前川貫一	三〇
監 沖野忠雄	外一二	監 原田貞介	外二四	監 中川吉造	二九	牧彦七	三一
小柴保人	一三	監 市瀬恭次郎	二三	安芸杏一	二九	片山貞松	三一
近藤岳五郎	二〇	岡崎文吉	札幌二五頃	宮川清	二九	田賀奈良吉	三一
		比田孝一	二六	池田円男	三〇	直木倫太郎	三二

後藤運平	三二	山内喜之助	四二	高橋嘉一郎	五	末森猛雄	一〇
金森鍬太郎	三三	牧野雅楽之丞	四二	遠藤守一（林）	六	近藤謙三郎	一〇
坂田貞明	三三	水野重民		富永正義	六	加藤伴平	一一
山根三樹	三三	久永勇吉	四三	宮本武之輔	六	桜井英記	一一
監 青山士	三六	田辺良忠	四三	浅見洋	六	磯谷道一	
茂庭忠次郎	三七	物部長穂	四四	春藤真三	七	中島時雄	一一
三浦矩明	三七	筧斌治	四五	和田重辰	七	永田年	一一
村幸長	三七	佐藤利恭	大正三	監 山下輝夫	七	檜山千里	一一
山田博愛	三八	監 鈴木雅次	三	監 岩沢忠恭	七	蔵重長男	一二
徳永保喜	三九	安東功	三	阿部一郎	七	井関正雄	一二
監 辰馬鎌蔵	四〇	三浦七郎	三	砂治国良	八	栗原斧衛	
松波秀一	四〇	河口協介	三	阪上丈三郎	八	長沢忠郎	一二
大久保清長	四〇	赤木正雄（林）	三	奥村孝蔵	八	広瀬孝六郎	一二
村山喜一郎	四一	萩原俊一	四	村野為治	八	監 稲浦鹿蔵	一三
臼井清彦	四一	金子源一郎	四	鈴木健二	九	上山鉄之助	一三
監 谷口三郎	四二	三輪周蔵	四	内村三郎	九	水谷鏘	
福田次吉	四二	榧木寛之	五	島野貞三	一〇	平尾勝	一三